

敦煌を売った男

松本龍見

一、大谷探検隊秘話

その日、吉川小一郎氏は、薄いグレーの背広を着て応接間に現われた。顔色は白く痩せてはいたが、白髪をきちんと七三に分け、唇は紅く、歯切れのよい話しぶりだった。

当時、吉川氏は九十二歳。明治末から大正にかけて派遣された、日本では初めての西域調査隊である大谷探検隊の唯一人の存命者であつた。

かれこれ十年前のことである。わたしは初めて敦煌へ行けることになり、その前に日本人として最初に彼の地を踏んだ吉川氏の話を聞きに京都へ出かけたのだ。

談たまたま日本で最初に敦煌のことを紹介した松岡譲の小説『敦煌物語』に話が及んだ。すると氏は、しばし沈黙のあと、こう感慨深げに言った。

「みんな作り話ですネン。わたしの『新西域記』でさえ、ホンマのことは……」

何も書けなかった、というのである。

ひとつには探検当時、すでに本願寺派内に疑獄事件が持ち上がっていた。三次にわたる探検隊の中央アジア調査に対して、これを指

揮した門主・大谷光瑞の足元から糾弾の火の手が燃えひろがっていたのである。

一方、神戸の六甲山上にあった「二葉荘」に蟄居する形で滞在中の門主からは、

「こんど第四次を出すときは、おまえさんに行つてもらうから……」

と、親しく声をかけられていた。

明治四十四年「一九一」の当時、吉川は二十六歳。門主の大谷光瑞は三十五歳の若きながら事実上の隠退に追い込まれようとしていた。

その頃、吉川に先立って派遣された二十歳の橘瑞超は、前年「一九一〇」ストックホルムでスウェーデン・ヘーデンの知遇を得た後、タルバグタイを経由し中央アジアの第三次探検に入っていた。トルファン周辺の調査を終え、タクラマカン沙漠をタリム河にそって横断、カシユガルから于闐を経て、さらに崑崙山中に踏み込んでいた。計画では、チベット高原に出る予定だった。

その橘から連絡が途絶えた。予定ではチベット高原から八月には敦煌に出て、千仏洞で発見されたという「唐経」を収集して帰る手はずであつた。

「敦煌石窟の発見物」と題し「千年前の古書

巻十余箱／悉く仏国人に持去らる」というセンセーショナルな小見出しの記事が、東京と大阪の朝日新聞に載つたのは明治四十二年「一九〇九」十一月十二日付。

前年「一九〇八」、敦煌で六千点以上の古文書を得たポール・ペリオは大部分を密かにフランス本国へ送った。ペリオは本国への帰国に先立って再び中国を訪れ、一九〇九年の五月、唐代写本の優品数十点を携え、南京、天津、北京で、中国人の学者たちに披露したので。

明治四十四年当時、こうした経過を大谷光瑞がどこまで承知していたか不明だが、「橘から連絡がない、消息が不明や」と、二葉荘では門主一人で騒ぎ出したのだという。

「それ行け！」
背中をドンと叩かれるようにして吉川が海を渡つたのは、門主の命を受けてから一週間後の一九一一年五月二十九日。その「命令書」なるものも、ちゃんとあつて……

「それ、みんな持ってますねンで、いま。持ってるけども、見せてええか、わるいか、わからんから」

といていたが、敦煌文書の買い付けが主



吉川小一郎は難所・六盤山を越え蘭州へ

たる目的だったことは話の前後から明らかになる。

「すると、橘さんを搜索するというのは、吉川さんを敦煌へ行かせるための口実だったわけですね？」

「もう時効にかかったから言うけれど、みんな光瑞さんの策略や。とにかく敦煌まで行って、そこでジツと待つておればいい、という話で……」

慌しい出発だった。神戸では写真の乾板を買い、バロメーターやサイクロメーターといった観測機器を持たされ、それに護身用の短銃、キニーネの丸薬や重曹を携行させられた。

「カネは上海へ送っておくから……」
という話で、ひとまず門司港から加賀丸に乗船。二日間の船旅で上海に上陸したのは五月三十一日。

それから二週間余り、上海に滞在して「カネオクレ」との催電を二度、三度と打つても、京都からは何の音沙汰もない。四度目の催電に対する返事は「カネは現地にて調達せよ」といった素っ気ない内容。もはや京都の本山からは、沙漠の探検などに要する費用は、ビタ一文も出せる状態ではなかった。

「上海で、お金が来んもんやから、非常に困ったわけですけど、藤山さんが見えて、千円渡してもろて、それで……」

ようやく六月十五日に上海を発つことができた。

上海から漢口までは船に乗って長江を遡航した。鎮江、南京、安慶と寄港し、四日目に漢口に着いた。

六月二十三日、漢口から急行列車に乗り、夜中の零時半に河南省の鄭州に着いた。駅前旅館で仮眠をとり、その日のうちに列車を乗り換え、四時間で洛陽に着いた。鉄道は当時ここまでしか通じていなかった。

洛陽ではロバ四頭を調達し、それに荷物を積んで西へ向かった。吉川自身は騎行だが、ロバ車を引き連れての旅は西安まで十二日間も要している。洛陽から西安までは三百八十七キロ、今では急行列車で七時間の距離である。さて、西安から敦煌までは約二千キロ。その間を、わたしは一九八七年秋の四度目の敦

烏鞘嶺で祁連山脈を越え、河西回廊へ入る



煌行の帰り道に全コースを車に乗って走破したが、現在でも八日間かかった。吉川小一郎の日記を調べると、その間すべて騎行で八十八日間を要している。なんと三ヵ月に近い道のりだ。

西安を七月十四日に発ち、平涼まで十日間、さらに蘭州まで十日間かかり、合わせて二十日間。途中、毛沢東に率いられた紅軍も長征では難儀を極めたという六盤山を越えて行く。

吉川の計測では、山頂は標高二千六百八十メートル。

「六盤山ツていうのは岩山で、ガタガタの馬道や。たいてい馬車の通るところだけ、一尺ほど凹ッこむほど何してますネン。馬で行っても、馬車で行っても苦勞な道で……」

わたしは吉川と違つて南まわりの道を行つたが、これがまた標高三千メートル以上の秦嶺を越す大変な山道だった。何しろ『三国志』の昔、蜀の孔明と魏の仲達軍とが互いに陣地を取り合つた地帯だ。至るところに昔からの山城の址が見える。

吉川が蘭州城内に入つたのは、夏の真盛りの八月二日。着くや否や街市に出て、防寒用の羊の毛皮を買っている。これから先の漠地では、夏でも夜間は氷点下にさがる地帯での露営も覚悟しておかなければならない。まずは生命にかかわる防寒が先決だった。

蘭州を出発したのは八月十二日。十日間の滞在を余儀なくされたのは、幌つきの大きい馬車の調達に手間取つたから。

また、ここで清朝の大官が同行を求めてきた。日本の士官学校に留学したこともあり、これから新疆へ向かうとのこと。吉川としても、途中の漠地で馬賊に襲われるやもしれず、そんなとき清朝の武官（日本軍の旅団長に当たるといふ触れ込みだった）が同行してくれていれば、何かと心強い思いもあった。

「日本でも、旅は道づれ世は情け……」

という話から、ひとまず蘭州の西北七百三十四キロの肅州（酒泉）まで同行することにな

つた。酒泉の西方にある嘉峪関までは、まだ清朝の支配が及んでいるはずであった。

祁連山脈は八月十七日、標高三千二十メートルの無車嶺（今の烏鞘嶺）という所で越えた。二日後、涼州（武威）に着いた。そこで吉川は、敦煌に赴くという無銭の旅客をボーイとして雇う。

この年は雨が多く、一行はゴビ灘の礫石と河水の氾濫に悩まされた。甘州（張掖）には八月二十七日に着いている。九月三日、肅州に到着。嘉峪関は九月七日に通過した。

「嘉峪関には税関がありまして、門の出入りの所に兵隊がおつて、なかなか厳重にやつてますネン」

ここから敦煌までは西へ約四百キロ。吉川が通過したのは「辛亥革命」の年であり、清朝の官吏が新疆方面へ亡命したりするのを監視する意味もあった。現に、蘭州から同行していた例の大官たちは、いつの間にか姿をくらましていたのである。

「実は革命党やツたんです。つまり清朝に対する袁世凱の味方やツたんですな。迪化へ行つて、迪化の總統に「清朝をやめて、革命党へ入れ」いうて、説き伏せに行つて、先生たち殺されてしまったんですワ。あとで私が行った時、城門に首だけ晒されてたんです」

「それは、凄（さわ）い話ですネ。ウルムチといえは、その頃から新疆の都ですが、城門に敵の首を晒すのは何千年も前からの風習で……『京』という字がもとと城門の象徴だったということを思い出させますね」（白川静著『漢字百

話』によれば、国の都を「京都」とよぶのは、敵の屍骨を集めて都城の門を建てたからであるという。）

吉川が敦煌の東百二十キロの安西城に着いたのは、九月十四日。ここに、京都から来信があり、大谷光瑞からの新たな「命令書」も受け取った。吉川自身が途中から橋端超宛に出した葉書二葉も受け取った。橋はまだ敦煌に着いていないことが明らかになる。

ここで吉川は、はやくも電信局長から「三蔵法師記名の唐経」を得た。王道士が敦煌から持つて来たものに違いない。あるいは贗物が安西あたりにまで出回っていたものか。先に「刺繡額地一枚、鐘詰四箇、茶一罐を贈り、



敦煌で吉川小一郎が部屋を借りて滞在した一家



スタイン隊撮影の荒れはてた莫高窟外觀



スタインの見た古文書や經典の山 藏經洞から運び出され束ねられ麻布で包んであった

二、迷宮の秘庫発見

吉川が日本人として最初に敦煌莫高窟を訪ねたのは十月十日。この日、「唐經」を得るた

之を獲んと勉む」(九月十五日『支那紀行』、以下は日付のみを記す)、その見返りの獲得であった。
安西を発ったのは十月三日の晩、翌朝「瓜州」に着いた。この瓜州城は、今は沙漠の中に棄てられて住む人もない。
吉川が敦煌に着いたのは、十月五日の晩六時。ターバンを巻いた「纏頭」(回族)の家を借り、ここに向こう三ヵ月余り住まうことになる。幸いこの家の井戸水は良好で、家主もその夜、葡萄と麵を携えて歓待してくれた。

め、敦煌文書の発見者である王道士と最初の交渉をした。

「王道士というのは、何歳ぐらいだったんですか？」

「さア、四十ぐらいでツシヤロカ。いや、もう少し老けてたかも知れまへん……」

すると、いわゆる「藏經洞」を発見したとき、三十前後ということか。もつとも「今世紀最大の考古学上の発見」といわれる大事件が、正確には何年何月のことか未だに明らかではない。

「わしらには光緒二十六年と、はっきり言うてましたがネ」

清の光緒二十六年は、西暦では一九〇〇年。その旧暦五月二十五日、もしくは二十六日朝という説が有力ではある。

ところが発見の経緯について、第一発見者である道士(道教の僧)・王圓籙自身が粉飾し、適当に話を作って喧伝したことから、さまざまな説が生まれる結果となってしまう。楊という写経生が、ある日キセルで煙草を吸いながら仕事をしていたとき、火種に使う及々草のこよりを壁にさしたところ、どこまでも入ってゆくので不思議に思い、壁面を叩いてみたら内部は空洞であった。そこで……という説もあるが、これでは第一発見者が楊という写経生になってしまう。

そこで王道士としては、やはり長年たまっていた砂の山を除去していたところ、突然雨道の壁面に亀裂が走った……としておくのが無難なところだろう。実際、今でも第一七窟



王圓籙の墓[下]とその南面に刻まれた墓誌[上]



王圓籙がかつて住んでいた大清真(下寺)
左手の断崖中央が16窟

(蔵経洞)のある三層楼の近くは見る間に砂が降りつもる地帯で、たえず砂を掃いていなければ通行も儘ならないほどののだ。
いずれにせよ、この石室秘庫の発見者は謎の多い人物だ。
「どんな印象でしたか？」
「それは強かもンで……」
往生したという。何しろ大谷探検隊が敦煌を訪れたとき、すでに敦煌文書の一切は北京へ運ばれてしまったことに表向きはなっていた。だから初対面の吉川には、
「没有! (何もない)」
とだけ言って、取りつく島もなかった。

「ここへ来る前、安西の電信局長から、唐経を得たけれども……」
というと、ややあって反応を示した。
「それは、いくらで買ったものか？」
「かなりの額で……」
そう言うてやると、王先生の顔色が変わった。
「それより本物の、もつと良いのがある」
まるで電信局長からは贗物を掴まされたような口吻だ。
「日本人、なぜもつと早く来なかったか」
そんな言い方もした。
四年前、仏教とは所縁もない「陰国人」が

来て、何やら三蔵法師の名を語って貴重な経巻多数を持ち去った。ハンガリー生まれの英国人、オーレル・スタインのことである。

「腰に拳銃を下げてネ、しかも青龍刀を持った兵隊を連れて来たから……」

怖くて仕方なかった、まるで強盗に出会ったようなもんで、始めは生きた心地もなかったという。

続いて翌年、車髻を生やした「法国人」が来た。この若者は上手な北京官話を使い、しきりに北京の学者とも知己が多いとか何とか言って、彼らに鑑定してもらう必要があるとも話していた。

「それで、わしは酷い目にあつたわけさ……」

北京の学者たちが騒ぎ出して、その翌年、蘭州から役人が来て、

「残ったものを全部出せ！」

という厳命で、みんな持つて行つてしまつた。

大体、藏経洞が発見されたとき、王道士は直ちに敦煌の役所に届け出ている。安西や酒泉の役人にも経巻を持つて行き、どんな価値のものか値踏みを頼んだ。

ところが、はじめのうちは誰も反応を示さない。反古同然の扱いだった。ただ敦煌知県（県長）の汪宗瀚は、多少なりとも書画骨董にたしなみのあった人で、わざわざ千仏洞まで来て写本や絵画などを見本として持ち帰った。

それから二年が経過した。葉昌熾という書画骨董に目のない男が甘肅省の学政使（教育長）として蘭州に着任した。

彼は一九〇二年に着任すると、敦煌知県の汪宗瀚に対して、

「何か変わった出物はないか」と尋ねた。

そこで汪知県は、二年前に王道士から届けられた藏経洞出土の写本や貝葉本、観音を描いた絵などを贈った。

葉は大いに関心を示し、これをまとめて蘭州の役所に移管すべきと、省の布政使に建議している。ところが、それを敦煌から運ぶと

なると、馬蹄銀五、六千両（今の数十万円）の費用がかかることが判明した。その結果、敦煌知県の汪宗瀚に対して、

「すべての経巻・画像を点検し、もとの通り石室の壁に封をしておくように」

との命令が届いたのは、一九〇四年三月のこと。王圓籙もまた、言われるままに秘庫の入口に泥レンガを積み上げて封をした。

スタインが敦煌に来たのは、それから三年後の一九〇七年三月。結局、藏経洞の第一発

藏経洞内でろうソクの灯をたよりに山積み古文書を調べるペリオ



見者は王圓籙だが、敦煌文書の学術的な価値を最初に見いだしたのは外国人であったということになる。

ちなみに松岡譲の『敦煌物語』では、敦煌の文物を最初に外国へ持ち出したのはスラインということになっている。だが、姜亮夫の『莫高窟年表』（上海古籍出版社）によれば、その前にフランス人の外交官ボナン（博南）という者がいる。彼は一八九九年に新疆を横断して敦煌の千仏洞に至り、唐の大曆十一年（七七六）と、乾寧元年（八九四）の題記がある版画四幅等を持ち出した。

また、オプルーチェフの旅行記『中央アジアの僻地にて』によれば、ロシアの商人クルシキンがジュンガリアで中国の商人と雑談していたとき、敦煌の千仏洞から大量の古写本が発見されたという噂を耳にした。そこで彼は、ゴビを渡って敦煌に急行する。

クルシキンが敦煌に着いたのは、一九〇五年十月。彼は、あらかじめ用意した僧衣用の織物、線香、灯明油などの商品六包みと、藏経洞から出土した文書との交換を王道士と交渉した。その結果、この用意周到なロシア商人が得たのは、古写本の包み二つと仏像や経文の書かれた絹布等であった。

写本は紙の質、厚さ、色などが異なるもので、漢文写本をはじめモンゴル語、チベット文字、トルコ語など中央アジアの諸語、インドのサンスクリット（梵語）、さらにブラフミ文字の写本まであったというから、かなり貴重な文書ばかり。それが王道士にとつての

日用品と物々交換されたのである。

王道士の名誉のために言っておけば、この時点ではまだ金を貰って文書を買ったのではない。ただ藏経洞から出土した文書が何やら価値のありそうなものに王道士に思わせたこと、また封をしておくべき秘庫の文書に手を付けさせた点で、このクルシキンなるロシア商人の訪問は悪魔の最初の誘いであったかもしれない。

その二年後、現代中国の見解では「憎むべき強奪者」の筆頭にあげられるスラインが姿を現わした。敦煌文書買収をめぐる王道士との虚々実々の駆け引き等については、すでに小説『敦煌物語』でも詳しく描写されている。

したがって、ここではスラインと、その翌年に来たペリオの買収交渉については繰り返したくない。ただ一つだけ指摘しておきたいのは『敦煌物語』で両人は「文化侵略者」との烙印を押されているが、いずれも彼らの「手柄話」を素材にして物語が構成されているということ。そのため、王道士は「無知文盲」にして「狡猾な」売国奴という風になっ

てしまっている。

一体、王圓籙という人は、本も読めなければ字も書けなかったのだろうか。あえて王圓籙のことについて敦煌研究院の誰彼をつかまえては話を聞いてみる。すると、「文盲ということはない」

という答えが返ってくる。その証拠もある、といって示されたのは、向達藏本の「王道士

薦疏」なる文書であった。

これは王圓籙が自らの来歴を記した上で、荒廃を極めていた千仏洞の補修を決意するに至った心境を述べたもの。そのためには先立つものが必要で、募金を呼びかけた趣意書のようにも読める。

それによると——王圓籙は、「貧道」と自らへりくだって「湖北省麻城県人」であるという。現に「敦煌千仏洞住持」と称するが、当時は道士が仏寺の住職を自称して不自然でない時代であった。

王圓籙の出身地を先の『敦煌物語』では「山西省の片いなか」としているが、実際は莫高窟の入口前に立つ王道士の墓誌にも「湖北麻城県人也」とあるから、この方が正しいのだろう。

彼は郷里の麻城県にいたときから「風骨飄然」として出世の想いを抱いていた。たまたま麻城県では連年飢饉に見舞われ、荒廃して郷里を逃げ出す者が多く四散した。彼もまたそのなかの一人であったことになる。

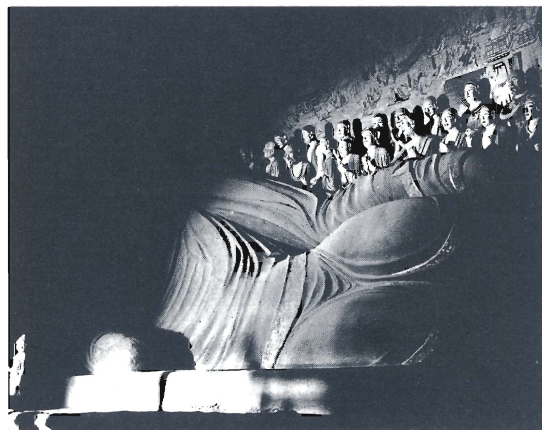
甘肅省の酒泉まで来て道士になり、受戒して修行も積んだ。そこで西の果て敦煌城の東南方四十里（約二十キロ）に千仏洞があると聞いた。古名を皇慶寺といい、石山の側にあって、なかには石仏や泥塑像が万をもつて数えるほどあるという。

来てみると、洞内の塑像は破損に堪えず、何年も前から賊に荒らされて見るも無残な状態だった。そこで「貧道」（王圓籙）は、募金を集め、これを補修しようとの誓願を立てた、



大谷探検隊が撮影した崩れ落ちそうな莫高窟

「下」大谷探検隊が写した148窟に横たわる釈迦涅槃像
幅15メートル 盛唐期の作でその後修復が施されている



というのである。

文書はまだ続くが、ここまで読んだ限りでも本人でなければ知りえない来歴が多く記されている。

「誰かに頼んで書いてもらったのではないか」

という人もいるが、本人の自筆であるとする研究者も多い。道教の経典を読むことも出来たらしい。

問題の蔵経洞が発見された日時について、この文書では「武拾陸年伍月武拾陸日清晨」（光緒二十六年五月二十六日朝）となっている。西暦でいえば一九〇〇年七月三日の早朝である。

一方、王道士の墓誌には「光緒廿五年五月廿五日也」とあって、こちらは西暦一八九九年となる。まる一年の違いだが、いずれが正しいか今や迷宮入り。

但し一八九九年とすると、この年の九月に「法国人博南」が来て、版画や碑文の拓本を持ち去ったことは先に述べた。彼は蔵経洞から多数の文書が出土したことを知らなかったのだろうか。あるいは住持の王道士が募金にでも出歩いていて、千仏洞を留守にしていたのだろうか。

三、「文化侵略の古戦場」

日本の大谷探検隊が敦煌を訪れたとき、すでに蔵経洞の内部は空っぽ同然だった。

「なんもあらしまへん」

吉川が二度目に千仏洞を訪れたのは、十月十六日。

その日、敦煌県城から「先日の路を約二時間半にて直ちに洞内に到り、経文の断片を得たり」とある。しかし「既に三洋人の発掘を経て、其の残滓さへも嘗むるに由なく、感無量」といった状態。

「まるで残飯あさりのようなもんで……」

吉川は八日余り千仏洞に滞在し、入れる石窟は限なく見てまわった。

現在、敦煌研究院の付けた窟番号でいえば、第四四四窟の入口部分に当たるところであらう。その北側の壁面に、

「日本 京都 吉川小一郎 明治四十四年十月二十日」

と、鉛筆で書かれた文字が見える。

わたしが最初に敦煌を訪れたとき、今も残っているか確認を求められ、およその位置を教えられた箇所である。行ってみると、わざわざ捜すまでもなかった。

「これが昔の日本帝国主義者が残した落書きです」

そう言うって案内人から指し示された。

実際、大谷探検隊もまた、イギリス、ロシア、フランスといった西欧の帝国主義列強に伍して、敦煌の地を「文化侵略の古戦場」（松岡護）としたのであった。その一例として……「朝来洞窟を精査し、諸像中最も精巧にして、損傷少きものの二軀を選び、道士に交渉して、是れを購ひ、行李に収む」（十月二十三日）

とある。翌朝、吉川は県城に戻る。すると、

「千仏洞の道士来る。唐経と過日來の謝意に銀十一兩を与ふ」（十月二十五日）

今では信じられないような話だが、唐経四十巻と塑像二軀、それに八日余り千仏洞の客室に泊めてもらった謝礼として、わずかに銀十一兩を与えただけ。

これは後日談だが、ついでに記しておかないと歴史の闇に消えてしまう恐れもある。その「塑像二軀」の行方について、こんな聞き書きがある。

「二鉢、持つて帰ってきたんですね。完全に二楽荘で修理しましてね」

この「観音像外一軀」が現在、なぜか韓国の博物館にある。その転変の経緯はまた複雑に入り組んだ話になるので、ここでは所在だけを記しておく。

さて吉川は十月二十六日、敦煌に来て初めて結水をみる。わたしも最初に敦煌入りしたのは十月二十四日の夜だったが、翌朝には疏水に氷が張り、宿舎に暖房が入ったのを記憶している。敦煌では、これから先の半年近く長い冬ごもりの季節となる。

吉川が于闐からのキャラバン到着に神経をとがらせていたのは、橘の消息なりとも得たためだった。すでに彼の荷物は敦煌に着いている。かつての西域南道を敦煌に向かつているのは確かだが、どのあたりを旅行しているものか知れたかった。それに気がかりなのは「大革命党」の接近だった。

「陝西以東大革命党起り、郵電全く不通。此の乱は清曆九月七日より始まるも、何の日に

終熄するを知らずと。……若し橘氏の消息なほ二ヶ月も不明ならば余は財囊を払ふに至らん」（十二月二日）

あと二カ月分の旅費しかない。敦煌の住人も革命党の切迫に浮足立っている。回族や西藏人は、青海省や新疆方面へと避難する相談もしている。王道士などは、さしずめ真先に逃げ出してしまいうに違いない。そんな心配をしていると……

「千仏洞の道士来る。洞修理の爲め蘭州に赴きたるも、乱時なれば衙門より大金を得ざりし如し。故に所蔵の唐経を売却せんとす、之を売んが爲めに來れるなり。所携のもの質佳ならず、良品を持ち來れと云ふも応ぜず」（十二月二十三日）

一見して贗物と知れたような代物。目ぼしい優品は、すでにスタイン、ペリオ等によって国外に持ち出されてしまった後だけに、王道士としても苦しいところ。わずかに隠し持った唐経を種に、写経生を雇って贗作づくりに励んでいる。

吉川にしてみれば、そんなことは先刻承知なのに、まだ懲りもせず売り込みに来る。しかも「暗に寓主と相談れる疑あり」ということで、そろそろ敦煌を立ち去って橘の捜索に向かいたい気にもなっていた。

「和闐より纏頭三名來投す。橘氏の消息を問ふも知らず、漸く失望を感ず。兩三日に同地より追着する者ありと、聊か自ら慰む」（十二月二十六日）

かくして明治四十四年（辛亥）は暮れ、吉川

は一人辺境の敦煌にて新年を迎えることになる。西安以東は革命党が支配して電信は不通、故国に向けての郵便も返送されてくる始末。賀状も出しようがなかった。

あけて明治四十五年の元日、前の敦煌知県が数日内に蘭州へ向かう告別に訪れ「唐経」一卷を贈られた。今や王道士の持参する写本よりも、こちらの方が遙かに信用のおける良本だった。すると、また王道士が訪ねて来る。「千仏洞の道士、蒙古字の如き経巻を携へ来る。余鑑定する能はず、橋氏来着の日を期す」(二月七日)

先に漢訳写本の贋作を見破られたので、こんどは「蒙古字の如き経巻」を持って来たのだらうか。西夏文の写本なら価値は高いが、藏経洞からは出土していないはずだ。(ちなみに「敦煌物語」では、ペリオが藏経洞から西夏文の写本を得たことになっているが、これは作り話。このとき吉川が得たのはウイグル文字の経巻だった。)

こうして吉川は「当地淹留(えんりゅう)一百余日を過ぎ」と、敦煌城内の大小胡同(路地)も、ほとんど歩き尽くした。道行く人も、初めて当地に来た日本人が「唐経」を欲しがっているのを聞き及んでいたに相違ない。

一月十八日、一農夫が「唐経」二本を携えて来た。これを二両二分で購入した。

一月二十二日、こんどは別の漢人が「唐経」四本を携えて来た。そのうちの一本は、未だかつて見ないほどの良本だった。全部合わせて五両で買った。

しかし、こんな生活をしていては、遅かれ早かれ財布は底をつくに決まっている。敦煌の街中に悪い評判が立たないとも限らない。吉川は遂に意を決し、安西に従僕の李を派し、打電することにした。その電文が残っている。

「橋(や)衛(ゑ)不明、大搜索を要す、金無い、三千、蘭州支那銀行へ、電為替乞ふ、安西へ返電待つ、ヨ」(二月二十六日)

その日、吉川は独り静かに読書していた。午前十一時頃のこと。

「突如一纏頭闖入し来る。何事ならんと凝視せば、実に意外、是れ橋氏なり。喜心感激、午前十一時より、翌日午前二時まで何事を語りしかを知らず。氏に逢ふや直ちに阿弥陀洪(アミダホウ)の僕を急派して、安西に派せし李を追ひて帰らしむ」

このあたり小説『敦煌物語』では、いかに二人が劇的な再会を果たしたか、物語としては一卷のクライマックスとなっている。まるで男二人が抱きつかんばかりで、ベッドに入ってから夜を徹して語り合ったことになっている。

しかし、つもる話は山ほどあったが、いつでも再会の感激に浸(ひた)ってばかりいられない。一月三十日、二人は連れ立って千仏洞を訪れた。

「夜九時頃、道士は唐経四十余本を携へ来る。約に依るなり。道士の態度は恰も賊の贓品(ざんぴん)を運ぶに似たり。他に余本なきやを問へば復た別に四十余本を出す」(二月三十一日)

王道士は、今の莫高窟藏経洞の前にある下寺に住みついていた。その自室から夜半、あたかも贓品を運ぶような態度で二人の客室に入ってきたという。

「前八時半、七度。兩名は道士の室に赴き戸棚を見る。唐経多数あり。道士に交渉して、唐経一百六十九本を馬に積み、後三時廿分千仏洞を発す。燉煌に帰れば城門既に閉ず。開門を待つこと十数分、寒空十四夜の月を飽看す」(二月一日)

今は跡形もなく取り払われているが、当時の敦煌県城には堅固な城門があったという。

翌日、王道士は「唐経」一百六十九本の代金を請求に来た。銀百両を支払った。

まもなく日本人兩名が敦煌を立ち去るのを知って、さらに翌日、また宿舎を訪ねて来た。

「晚七時、道士は経巻二百本を携へ来る。故意に贋物を挿入せる如きを以て、夜半までに上中下の三種に分類す」(二月三日)

これらは翌日、銀五十両で購入した。

二月六日、吉川と橋の兩名は「文化侵略の古戦場」というべき敦煌を去って安西に向かった。

四、その後の敦煌

二月十二日、北京では「ラスト・エンペラー」こと宣統帝が退位し、ここに秦の始皇帝以来二千百年の王朝支配が終わりを告げた。革命党は酒泉にまで迫っていた。

安西に待機中の吉川が「清朝亡びて共和政

体を組織せしを知る」のは、四日後の二月十六日。橘は酒泉に向かうことができず、いったん安西で吉川と別れて東南方に向かつている。

一方、吉川は、大谷光瑞の「命令書」どおり安西から西北に向かい、新疆に入つて第四次の探検に従事した。ハミ、トルファン、クチャ、アクス、カシュガル、ヤルカンド、ホータン等、かつての西域諸国を歩いている。そしてタクラマカン沙漠を横断、ウルムチへ出て帰国準備にあたる。

その吉川が再び敦煌に姿を見せたのは、大正三年（一九一四）二月十三日。ちょうど二年ぶりのことであつた。

敦煌県城に入つて驚いたのは、物価の騰貴が甚だしかつたこと。それに二年前の知己は多く離散してしまい、わずかに于閑から来たインド人だけが宿舎に訪ねて来る程度。

「千仏洞に向はんとせし時、道士来る。彼は衙門を憚りて夜間にあらざれば来訪せず」（二月十七日）

翌日、吉川は千仏洞を再訪した。今回の目的は、もう「唐経」を得ることではない。前回計測し忘れた標高を計ってみると、「比高一千五百三十米」とあつた。さらに「修理を経て、洞内の景趣一変せり。道士も此の地に来る」という。

敦煌県城では「革命党」の来襲におびえて離散した者が多かつたのに、陸の孤島ともいふべき沙漠の中の千仏洞では、王道士が黙々と補修に努めていたのである。

吉川は二月十九日、見違えるばかりに整備された千仏洞を後にして、もう敦煌県城に戻ることとなつた。そのまゝ戈壁灘の只中を行進して帰国を急いだ。

それから一カ月後のこと。またしてもオーレル・スタインが千仏洞にやつて来た。前回、彼が得たのは古写本二十四箱、古美術品五箱、合わせて二十九個の大箱だったが、こんどは仏典類六百巻などを五箱に詰めて持ち去つた。

大体、スタインの数次にわたる中央アジア探検が可能であつたのは、大英帝国のインド政庁と大英博物館から多額の費用が捻出されていたからである。そのために、彼が持ち去つた文書類は大英図書館に、紙本や絹本に描かれた絵画、刺繍などの美術品は大英博物館に収められている。（わたしは一九八八年九月に東山健吾教授とともに欧州各国の美術館・博物館を訪れた際、それら流出品をウィットフィールド・ロンドン大学教授の好意により見せてもらった。）

スタイン・コレクションの総点数は合わせて一万五千点余りと見られるが、そのうち漢文写本が八千百二点と最も多く、他にチベット文書、サンスクリット古写本、ホータン語、クチャ語の写本、更にソグド語、古代トルコ語、モンゴル語の写本等もある。

続いて敦煌に来たペリオの場合、フランスの中央アジア調査隊長であつた。彼もまたフランス本国の予算によつて派遣されたの言うまでもない。したがつて、本国へ送つた敦煌文書はパリのフランス国立図書館に収蔵さ

れており、また絵画類はギメ美術館に収められている。

そのうちでも、特に注目されるのはブラフミ文字の文書、トハラ文字の文書、ウイグル文字の文書などの全部、チベット文字の文書は二千七百点、さらに漢文は仏典以外の文書全部、仏典は年記その他があつて重要なもの等々、合わせて六千六百点を数える。

さて中国では一九一〇年、蘭州の陝甘總督・長庚の命により、敦煌知県の陳洪藩らが莫高窟を搜索した。そのとき残巻六千余巻を北京の京師図書館（現在の国立北京図書館）に移している。

これらの古文書類は最初、総点数八千六百七十九点とされたが、民国十八年（一九二九）の調査と整理によつてさらに残葉千九百九十二点が加えられ、総計九千八百七十一点といわれる。その後にも若干の収蔵があり、現在の北京図書館では一万数千点を超える敦煌文書の収蔵数になっているという。（わたしは一九八四年十月に北京図書館を訪れた際、ウイグル文字の経巻等を見せてもらった。）

次に敦煌を訪れたのは、今まで詳しく触れたように日本の大谷探検隊である。但し、この場合は国家の力を背景とするものではなく、大谷光瑞の私的な事業であつた。例の『敦煌物語』で「大谷ミッシン」と称して前二者のような国家派遣の探検隊と一線を劃しているのは、そのためであらうか。

大谷隊の将来した敦煌文書は、橘が四百余軸、吉川が百余巻といわれる。それらは現在、

多くは龍谷大学に収蔵されているが、その他にも各地に散在しており、日本国内にある敦煌文書は合わせて約五百点と推計されている。(約一千点という説もあるが、その場合は十分に贗物も含まれる可能性については本文中に指摘してある。)

大谷探検隊の後、なおも外国人による略奪の魔手は莫高窟に向けられた。その一例はロシア隊のオルデンブルグ、もう一人はアメリカのウォーナーである。彼らは敦煌に來たとき、すでに目ぼしい古文書類がないと知ると、壁画そのものの破壊を始めた。

まず、オルデンブルグは一九〇九―一〇年と、一九一四―一五年の二回にわたって新疆地区を探検しているが、第二次探検の際、敦煌に立ち寄った。そのとき少なくとも三千巻の古写本を持ち去った外、第二六三窟などの壁画をえぐり取っている。(レンギングラード市のエルミタージュ美術館の一室には、剥がし取られた壁画部分が敦煌将来の文物などと一緒に展示されていた。)

詳細は明らかでないが、現在ソ連のエルミタージュ美術館、ソ連国立東洋研究所レンギングラード支所には、合わせて一万二千点の敦煌文書が収蔵されているという。

アメリカのウォーナーは一九二四年、フォッグ美術館の調査員という肩書で莫高窟を訪れた。彼は、そのときハーヴァードの博物館専門家が開発した化学薬品を使ってゼラチン状にした布片を壁画に押しあて、表層の画面だけを剝離させる方法で合わせて二十六面の

壁画を剥がし取った。塑像数体もはずして持ち去っている。

現在の莫高窟では、第三二一窟、第三二三窟、第三二〇窟、第三二九窟、第三三五窟、第三三一窟、第三七二窟、第三二八窟などの壁画と塑像は無残に破壊され、痛々しい姿を晒している。

こうしてウォーナーが持ち去った壁画と塑像は現在、ボストンにあるハーヴァード大学付属フォッグ美術館の東洋美術部が独立したサクラ美術館に保管されている。しかし壁画は変色が著しく、塑像の表情もどこかしら暗い影をやどしているように見える。

＊

わたしは十年前に吉川小一郎氏の話聞いて以来、今までに五回ほど敦煌を訪問した。五万点以上の貴重な古文書類が出土した藏経洞にも入ってみた。

「こんな小さな窟に……」
いささか拍子抜けするような小さな石窟である。

北側の壁面には、この石窟の主人公である洪昇像の背後に双樹と二人の侍者が描かれている。

向かって右側の小柄な人物は比丘尼に見える。唇に紅をさしている。手には双鳳を描いた団扇を捧げている。

左側は男装の麗人。髪を双髻に結び、丸襟の長い上着の腰に帯を締めている。左手に巾を持ち、右手には長い杖を執る。豊頬につくられているが、表情に憂いを帯びた樹下美人

である。

数ある莫高窟壁画の傑作中でも、ただ一つだけを挙げようと言われるなら、わたしは躊躇なくこの絵を選びたい。八百年以上もの永きにわたって秘庫に隠され続けてきた文書とともに、この壁画もまた二十世紀人に贈られた美の宝だ。

今世紀初頭までは知る人も少なかった敦煌莫高窟に今や年間万をこす人が訪れる時代となった。王道士という人は敦煌文書を買った男ではあるが、同時にまた宝庫の扉を開いた人でもある。



「石室宝蔵」の額がかかる莫高窟の牌樓



スタイン（一八六二〜一九四三）

スタイン探検隊のメンバー 前列中央の犬を抱いた男がスタイン、その左が通訳の蔣孝琬。スタインは中国語が話せず、王圓箎との交渉では蔣が大きな力を果たした。そのため彼は後世中国では「奴才（奴隸）」と蔑称されることとなる。1908年3月、ホータン地方ウル・マザーにて。

オーレル・スタインの名は「世紀の大発見」といわれる敦煌発掘秘話とともに必ず語られるほど有名である。西欧では「比類なき探検家」として、中国では「憎むべき略奪者」として、その評価は相反するものの、彼は外国人として初めて蔵経洞の古文書を目のあたりに見た人であることは間違いない。

彼はブダペスト生まれのユダヤ系ハンガリー人であったが、英国のロンドン、オックスフォード、ケンブリッジの各大学に学んだこともあって、一九〇四年にイギリス国籍を取得。それより前、英領インドに渡り、インド人の測量技師を連れてカラコルム山脈を越え中央アジアへの考古学的探検に乗り出していた。

スタインの探検は第一次（一九〇〇〜〇二）、第二次（一九〇六〜〇八）、第三次（一九一三〜一六）と三回にわたり東トルキスタンを踏査しているが、敦煌を訪れたのは第二次・第三次探検の際。楼蘭やミイラを調査した後、敦煌に入ったのは一九〇七年三月、スタイン四十四歳のときであった。ここで彼はトルコ商人から古文書発見の噂を聞き、千仏洞（敦煌莫高窟）へ

行ってみたが、あいにく発見者の王圓箎は留守だった。いったん敦煌から西方の沙漠に出て万里の長城跡や玉門関などを調査し、千仏洞に戻ったのは五月二十一日。警戒心の強い王圓箎を脅したり、すかしりの交渉の末、ついに蔵経洞の扉を開かせることに成功した。中から王が続々と運び出してくる古文書を調べはじめたスタインは、その質と量に驚嘆、すべての収蔵物を買収したいと願うが、王を説得するのは容易ではなかった。

結局、スタインは漢文書五十包、チベット語文書五包その他を四馬蹄銀（約五百ルピー）で買い取った。更に四カ月後に再訪した際の入手分もあわせ、古写本二十四箱、絵画・古美術品五箱、計二十九箱の木箱に収められた数千点の敦煌文書は、一九〇九年一月、大英博物館に到着した。それらは整理されたうえで翌一九一〇年六月に公開されるや、大反響を呼んだ。スタインは、その後も生涯を調査研究の旅に捧げ、一九四三年、アフガニスタンにおいて客死。遺言により、カーブル市内の外人墓地に埋葬されている。なお文書類は大英図書館に現在所蔵。



ペリオ (一八七八〜一九四五)

スタインに続いて敦煌を訪れた外国人は、フランスのポール・ペリオであった。パリ生まれの頭脳明晰なこの青年は、若くしてサイゴン（現ホーチミン市）のインドシナ考古学ミッシェンの給費生となり、その語学力をいかし、しばしばベトナムと中国の間を往復、文献の収集にあたっていた。二十二歳の若さで、ハノイのフランス極東学院の中国語教授にもなっている。

一九〇六年、彼がフランス政府派遣の中央アジア調査隊長になったとき、まだ弱冠二十七歳の青年学者であった。モスクワ経由で中央アジア調査行に入ったペリオ隊は、西域北道を東行してウルムチに滞在していたとき、新疆に流刑されていた清朝の皇族から敦煌出土の『法華經』一卷を贈られた。見ると、まぎれもなく唐代の写本である。

その貴重な価値に驚いたペリオは取るものもとらず、新疆からトルファンを経由して敦煌へと急行した。彼が莫高窟に姿を見せたのは、一九〇八年二月二十五日。それからスタインのときと同様に王圓箒とのやりとりがあったが、ペリオは中国語を自在に操ったため王圓箒も心を許したのかもしれない。三月三日、

ペリオは蔵経洞の中に足を踏み入れる。ひげ面のペリオが一心不乱に古文書と格闘する姿の写真が残されている。この日、彼は連続十時間、蔵経洞にこもりきりだったという。

ペリオはスタインと違い、中国語など十三の言語に精通していた。そのため蔵経洞内の古文書の質を鋭く見分け、六千点以上の優品を選び出し、それを銀五百両（約九十ポンド）で購った。玉石混交のあるスタイン・コレクションを質の点で遥かに凌駕している。ペリオ将来品は現在、パリのフランス国立図書館（文書）とギメ美術館（絵画）に所蔵。またペリオ隊には軍医で測量技師のヴァイヤン博士、写真技師のヌエットという優れたメンバーがおり、莫高窟の綿密な測量調査、多くの写真などの貴重な記録を残している。

翌一九〇九年、ペリオは北京へ行き、自らが得た敦煌文書の一部を中国人学者に披露、中国側はそこで初めて失ったものの大きさに大変なショックを受けた。敦煌残存の文物保全のための官令が出され、一九一〇年に残余の写経類が敦煌から北京の京師図書館（現在の国立北京図書館）に移された。

大谷探検隊



大谷光瑞

後列右が橋瑞超 左が吉川小一郎
安西に向けて出発する際

一九二二年二月六日

敦煌から



日本から唯一つ中央アジアへの調査に繰り出したのが大谷探検隊であった。のちに浄土真宗本願寺派の第二十二世宗主となった大谷光瑞（一八七六—一九四八）がロンドンに留学中、ヘディンやスタインの探検成果に刺激され、私財を投じて組織したもので、仏教東漸の遺跡を調査するのが目的だった。

探検は三度、もしくは四度に及んだ。第一次は一九〇二—〇四年、大谷光瑞自身が英国留学の帰路、ロシア經由で中央アジア入りし、パミール、カラコルムを越え、インドに出たところで父光尊（第二十一世）逝去の報に接して急ぎ帰国した。第二次は一九〇八—〇九年、野村荣三郎と当時まだ十七歳の橋瑞超が従った。このとき橋は単独で楼蘭遺跡を調査、李柏文書という第一級資料を発見した。しかし野村の前歴が砲兵軍曹だったことから軍事探偵の疑いがかけられ、インド駐在の英国情報部から二人を尾行するよう指示が出されていた。カシユガルでは旅費に困り、何も知らない橋は英国領事に借金を申し込んだが、その相手こそ尾行指令を発した人物で、日本政府に問い合わせがあった。

さて大谷隊が敦煌に赴いたのは、第三次と第四次の時である。第三次は一九一

〇—一二年に橋が単独で派遣され、第四次は一九一—一四年に吉川小一郎が先行していた橋と敦煌で合流するという形で派遣された。橋が行方不明となり、案じた光瑞が吉川に命じて探しに行かせたことになっているが、じつは吉川には敦煌文書を手するよう密命が下っていた。それにしては資金が苦しかった。その頃、光瑞は疑獄事件に係わり、地位が危うくなっていたからである。ようやく敦煌に着いたものの、すでにスタインやペリオが荒らした後で、中国側も残る文書を全て北京に運んだはずであった。ところが王圓箴は、なかなかしたたかな男で、密かに隠し持っていた文書に偽物をまぎれこませて売ろうとさえる。虚々実々、ようやく吉川らは文書や塑像などを買取り、橋が持ち帰っている。吉川はその後、第四次探検に従事し、帰路に敦煌を再訪した。

大谷探検隊は、ホータン、クチャ、トルファン、楼蘭などの遺跡から貴重な遺物の数々を将来した。文物類は旅順、ソウル、東京の各博物館に、敦煌写本などの古文書類は龍谷大学に分蔵され、その成果の概要は『西域考古図譜』（一九一五、『新西域記』（一九三七）などに示されているが、全貌は明らかにされていない。

本書は「芸術新潮」1988年5月号特集「ドラマ敦煌」を増補し、再編集したものです

第1部から第3部の窟内及び壁画・塑像写真は特記したもの以外は全て東山健吾撮影

風景写真撮影者・提供者は以下の通りです

野町和嘉——20頁下、21頁下、24頁上、28～29頁、30～31頁、32頁、113頁上中・下、114頁下

東山健吾——22頁下、64頁上左、85頁、88頁、96頁、97頁、98頁右、107頁左中上、109頁、110頁、112頁上中・下、113頁上右、114頁上中、119頁

大塚清吾——24頁下

映画「敦煌」製作委員会——98頁左

文物出版社——112頁中

大谷探検隊関係の記録写真は全て龍谷大学図書館提供

スタイン、ペリオなどの記録写真は、それぞれの報告書からの複写による

漢詩のうち、松枝茂夫訳は岩波文庫「中国名詩選」より、石田幹之助訳は講談社学術文庫「長安の春」より引用しました

参考文献——鄧健吾「敦煌行」（潮文庫）、松本龍見「敦煌往還記」、「中国万照⑥」（二玄社）他

26～27頁の地図製版はモリシタ

「敦煌への道」は「とんぼの本」編集部によります
本書記載のデータは1989年3月現在のものです



とんぼの本

敦煌ものがたり

発行——一九八九年 五月二五日

一三刷——一九八八年 三月五日

著者——東山健吾 松本龍見 野町和嘉

発行者——佐藤隆信

発行所——株式会社新潮社

住所——〒162-8711

東京都新宿区矢来町七一

電話——編集部 〇三二六六—五四一
読者係 〇三二六六—五一

振替——〇〇一四〇—五—八〇八

印刷所——大日本印刷株式会社

製本所——加藤製本株式会社

カバー印刷所——錦明印刷株式会社

装幀——平野甲賀

©Shinchosha 1989. Printed in Japan

乱丁・落丁本は、二面倒ですが小
社読者係宛お送り下さい。送料小
社負担にてお取替いたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-601971-X C0322

敦煌ものがたり

東山健吾 松本龍見 野町和嘉

